

キャラクター名 五代 慎也	プレイヤー名
------------------	--------

シンドローム	エグザイル エグザイル	ワークス	FHエージェントC	カヴァー	
オプション		年齢	15	性別	男
覚醒	感染	衝動	憎悪	初期侵食率	32 %
出自	姉妹	経験	FHへの畏怖	邂逅	欲望：価値の承認

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	29
肉体	4		0			4	行動値	5
感覚	2		0			2	(非装備時)	5
精神	0	1	0			1	戦闘移動	10
社会	2		0			2	全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正									
白兵	4		射撃			RC	3		交渉		
回避	1		知覚			意志	1		調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：	FH	2
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
骨の剣	白兵	4r+3	6	6		
100%↑	白兵	6r+3	6	7		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲：	0	合計回避：	0
EB:量産品		ロイス			
リエゾンサイン		対象	感情(pos)	感情(neg)	タイムス消費
		BL:FH	P 執着	N 恐怖	
		PU:姫路灯	P 尊敬	N 不安	
		GR:渦巻 魁輝	P 友情	N 隔意	
		リア・ノヴィコフ	P 尽力	N 不安	
			P	N	
			P	N	
			P	N	
		最大財産P:	4	残り財産P:	

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
C：エグザイル	2	2	MJ	-	-	SY	-	
効果：	C値-LV 下限7							
骨の剣	2	3	MN	至近	自身	自動	-	
効果：	攻撃[LV+5] 命中-1 G値6 の武器作成							
伸縮腕	1	2	MJ	視界	-	白兵	-	
効果：	射程変更。判定ダイス-[3-LV]個							
貪欲なる拳	2	3	MJ	武器	-	白兵	-	
効果：	判定ダイス+[LV+1]個							
メモリーハック	1	4	MJ	至近	単体	RC	-	
効果：	対象の〈意志〉と対決を行い、記憶を盗み見ることができる。							
異世界の因子	1	5	AT	視界	効果	自動	80	
効果：	シーン内で使用されたエフェクトをLV1で取得する。							
がらんどうの肉体	2	3	AT	至近	自身	自動	ピュア	
効果：	ダメージ-[LV+2]D							
デビルストリング	1	6	AT	視界	単体	自動	-	
効果：	制限のないATのエフェクト打消							
環境適応	★	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果：	あらゆる環境に適応できる							
鍵いらすの歩み	★	-	MJ	至近	自身	自動	-	
効果：	身体を変化させて隙間を抜けられる							
十徳指	★	-	MJ	至近	自身	自動	-	
効果：	万能鍵							
効果：								
効果：								
効果：								

某市の一般家庭、姉弟と両親の四大家族で暮らしていた。健康であること以外に取り柄のない自分と比べ、学業運動など万事において自分の完全上位互換である5つ上の姉が居たため、両親はいつも自分を姉と比較し、姉のように頑張れと心無い応援の心を並べてきた。それは家に留まらず、学校でも姉を知る人間は教師も友人も他人も等しく自分と姉を比べてきた。そんなこともあり中学に入るころには学校へ行くのも気が進まなくなり（それでもしっかり登校していたが）、両親と顔を合わせるのが少しずつ辛くなり、姉と会うのが段々と怖くなり、市外のゲームセンターなど姉を知る人間のいないところを好むようになった。そうして姉から逃げる様な生活をしていたある日、市内が災厄に見舞われる。珍しく自宅に帰りゆっくり寝るかと思ったある日だった。両親は揃って休みで、姉は出掛けているのか家にはいなかった。両親は姉と比べるようなことを何か言っていた気がする、いつものことだったから聞き流すようにして部屋へ籠ろうと考えていた時、気が付いた。両親の様子が異常だった。血走った目、狂った様に繰り返される言葉。狂気を感じつつも、その行動はどこかいつもの両親と変わらないように見え——気が付いた時には自分の手は血塗れだった。白い外骨格の様なものがまわりついた手は、とても人間のものにも自分のものにも見えず、嘘のように赤く染まったそれを馬鹿みたいに見つめていた。それが自分の意思だったのかは定かではない。しかし確かにその手で両親を貫き、殺した。その事実を受け止めきれなくなったとき、気が付けば家から飛び出していた。そして初めて知った。この地獄は自分自身だけではなく、町中に広がっていることを。

事態が飲み込めないままに街を彷徨っていると、見たことのない大人が自分と同年代くらいの子たちを保護していると声をかけてくれた。どこに連れていかれるのかは分からなかったが、この街ではないところへ行けるのならどこでも構わなかった。そうして街から、姉から逃げ、地獄はようやく終わると思っていた、だが本当の地獄はそこからだった。

保護され連れていかれた先はFHという超能力者の組織の構成員の養成施設だった。